

帝都モノガタリ

『青は狂気を描く』

本シナリオの内容は虚構である。

現実のいかなる人物、団体、その他のものと一切の関係はない。

本シナリオでは大正という時代、文化を扱っている為、現代において差別的な表現となるものが含まれていることがあるが、差別の肯定、助長する意図は決してない。

『青は狂気を描く』

the Blue for Insanity

「いや、ブルーは狂気だ」

「なに？」

「そういうパターンなんだよ」

——— デイヴィッド・マレル『オレンジは苦悩、青は狂気』より

はじめに

本シナリオは『暗黒神話 TRPG トレイル・オブ・クトゥルー』に対応したシナリオである。3～4人の探索者向けにデザインされており、プレイ時間は探索者の作成を含めずに2～3時間程度となる。

本シナリオは大正時代である為、『トレイル・オブ・クトゥルー・ジャパン』を使用することを想定している。

本シナリオは純粋、パルプのどちらのモードでも問題ない。キーパーの好みのモードでプレイするとよいが、傾向として純粋モードである為、パルプなアクションは難しいかもしれない。

キーパー向け情報

シナリオの概要など、キーパーが事前に読む内容である。

シナリオは大正中期から、震災前の帝都を舞台としていることを想定している。それ以前、以降でプレイする場合、キーパーは適宜、シナリオ中の年代や帝都の様子を変更すること。

また、本シナリオは帝都モノガタリに掲載の『灯火の行く橋』の後の物語となる。

独立したシナリオとして用いる場合は問題ないが、『灯火の行く橋』をプレイする可能性がある場合は注意して欲しい。

シナリオの便宜上、各場面に番号を振っているが、時系列ではないので注意すること。

核心的手がかりについて、対応した探索技能を記載しているが、ルールブック P.193『技能の使わせ

方』に基づいて適宜変更して構わない。キーパーはシナリオが停滞しないように、あるいはよりドラマチックに展開するように心がけよう。

シナリオの概要

探索者達は友人の画家、蕪木清晴は出展しているという銀座で開かれている怪想社主催の絵画展へ赴く。

展示場で彼が描いた異様な抽象画のような『青い絵』を見た探索者達は、蕪木ブルーとも呼ばれるその独特な青色に不安を覚える。

蕪木の描いた『青い絵』は、何故か非常な人気と『呪いの絵』としても噂が立っていた。

不穏な噂を聞きつつ、探索者達は『青い絵』の謎を追って、彼の懇意にしている画材屋『丹青堂』へ赴く。

『丹青堂』でその青の顔料の出所が、巢鴨の『枯野』であることを聞き出し、灰色一面になっている『枯野』の探索で、青く流れる異次元の色彩『宇宙の彼方の色』を発見して、撃退する。

彼の絵を買ったという温井継宗の屋敷の火事の跡で灰色の痕跡を見つけた後、兎島鎮の屋敷で『青い絵』が光を発して、周辺から生命力を吸い取って天へ帰っていく様を目撃する。

探索者達は下宿の屋根裏に隠れていた蕪木と彼の最後の作品を見つけ出し、『青い絵』が天に還る様を目撃することになる。

シナリオの背景

『枯野』に落下した『宇宙の彼方の色』を宿した隕石は、運悪く地表面近くで4つに分裂してしまった。

最初に孵化したのは、帝都モノガタリ『灯火の行く橋』のもので探索者達に撃退された。次に孵化したのは『枯野』の生物から生命力を吸収した後、宇宙へ帰っていった。これが現在の灰色の『枯野』の原因である。

残った二つはすでに吸収すべき生命が無い状態となった『枯野』で、隕石に籠ったまま時を待っていた。

たまたま近隣の住民が『枯野』に埋まっていた隕石の一つを掘り出し、珍しい青い石として『丹青堂』の主人に安く買われて、高価な顔料の代替品として使用された。

この『宇宙の彼方の色』を含んだ石を原料として作られた岩絵具を使用して描かれたのが、蕪木の『青い絵』である。

『青い絵』となった『宇宙の彼方の色』は、持ち主の精神に影響を及ぼし、生命力を吸収しながら宇宙へ還ろうとする。それが『呪いの絵』と言われる様々な事故や事件を引き起こすことになる。

蕪木の手元に残った『宇宙の彼方の色』は彼を操って『青い絵』を描かせることで自身や、碎かれて分裂した自身の分身を宇宙に還そうとしている。

シナリオの骨子

シナリオの流れは次の通りである。

時系列が前後しても問題ないものが多い為、キーパーは探索者の行動に合わせて情報を開示していこう。ただ、並列に探索を進める場合、忘れられる項目も出る可能性がある所以その際はキーパーから注意喚起するか、情報整理を促して忘れていることを思い出させること。

銀座の絵画展：銀座で怪想社主催の絵画展へ赴く。展覧会で出展者の一人である蕪木清晴の『青い絵』を見て、その異様さから絵の謎の調査に乗り出す。これがシナリオの**導入**となる。

蕪木に会う：蕪木は生命を削って創作に打ち込んでおり、今の作品が最高傑作で、最後の作品になると言う。

『呪いの絵』：『青い絵』は絵画の関係者から呪いの絵と噂されており、買った者は死んだり、狂った

りしている。

画材屋『丹青堂』：湯島天神の近くにある『丹青堂』という画材屋で、蕪木が使っている青い岩絵具を売ったことを確かめ、その入手先を知る。

『枯野』の探索：青い岩絵具の原料となる青い岩石を見つける。その中から現れた『宇宙の彼方の色』と対峙する。

過去の犠牲者：蕪木の『青い絵』を買った温井継宗の屋敷の火事の跡から、灰色の痕跡を発見する。

新たな犠牲者：蕪木の『青い絵』を買った児島鎮は、絵に生命力を吸い取られて衰弱し、『青い絵』が天へ還る姿を目撃する。

蕪木の最新作：蕪木の最新作は残った全ての岩絵具を使って天井裏に描かれている。天に還ろうとする『青い絵』を目の前にして、蕪木を助け出さなければならない。

探索者の作成時

実際のプレイの開始の前に、探索者同士の関係性は決まることが望ましい。

探索者の作成の段階で、事件の冒頭、「銀座へ怪想社が主催の展覧会へ、蕪木の絵を見に行く」ことを告げて、取得した(あるいは、する予定の)探索技能を絡めて、蕪木との関係や、事件にどうか関わっていくか、どう興味を持つのかを決めておく。

登場人物

シナリオに登場する人物を紹介する。

特に技能などは記載しないが、必要に応じてキーパーが持っている/持っていないことにするとよいだろう。

蕪木清晴、画家

かぶらぎ・きよはる、画家。

蕪木は西洋画を学んだが、その後に日本画に転

向。東京美術学校(現在の東京芸術大学の前身の一つ)を卒業している。

今までは鳴かず飛ばず、とまでは行かないがそれほど売れず、噂にもならず、知人の編集者に『怪想社』の仕事を紹介してもらって、なんとか糊口を凌いでいた。

『丹青堂』で青い岩絵具を手に入れて以降、怪奇路線、抽象画を描くようになり、これが売れるようになるが、徐々に狂気に蝕まれていく。

狂気に蝕まれるほど絵の凄みが増して、より評価されるという循環が出来てしまい、すっかり青い絵の虜になっている(『宇宙の彼方の色』の影響もあるが)。

現在、下宿先に閉じこもって最後の絵を仕上げている。

丹羽仁、『丹青堂』の主人

にわ・ひとし、『丹青堂』の主人。

先代は趣味人で商人だったが、2代目は職人気質でよい画材を取り扱うと評判である。

パトロンになれるほど経済的な余裕は無いが、資金に乏しい若い画家たちに格安で画材を提供するなどして援助している。

蕪木が手に入れた青い顔料も、『枯野』で手に入れた青い石を使って特別に安く作った顔料を作っている。

児嶋鎮、華族のパトロン

こじま・しずむ、華族のパトロン。

蕪木の『青い絵』の犠牲者の一人である。売れない時代から蕪木と付き合いがあり、それによって『青い絵』を贈られている。

最初はあまり気に入っていなかったが、『青い絵』=『宇宙の彼方の色』の“意志力吸収”によって絵を手放せなくなっている。

温井継宗、官僚

ぬくい・つぐむね、官僚。

蕪木の『青い絵』の犠牲者の一人である。話題の『青い絵』を購入した。

元々絵にはあまり理解が無い(興味が無い訳ではない)為、絵の良し悪しは判断できないが『青い絵』=『宇宙の彼方の色』の“意志力吸収”によって狂気に陥ってしまい、それに抗って絵を焼く為に放火、絵もろとも焼死した。

1:銀座の展覧会

銀座で怪想社主催の展覧会が開かれている。

主に若手(と言う名の売れない画家)が中心のものだが、その一人に探索者達の友人である蕪木清晴も混じっている。

蕪木は現在、噂になっている『青い絵』が売れている為、若手を脱しつつある。

蕪木がまだ売れていなかった頃、学生時代の知り合いを通じて怪想社の雑誌の挿絵の仕事などを受けており、今回の出展となった。

蕪木の絵が4点ほど展示されており、3点はオレンジ色を基調とした写実的な風景画だが、1点だけ全く異なる抽象画のような『青い絵』がある。

怪想社の取り扱うジャンルが怪奇・幻想である。それらをテーマにした絵画が多い中で、この『青い絵』は別格と言える。

その蕪木の『青い絵』は純粋抽象画のように何が描かれているかは判別、理解し難いが、画面を埋め尽くす『青』に吸い込まれる印象を受ける。

『青い絵』を見た探索者は、難易度4の<安定度>判定を行う(1点減少)。

展覧会の会場には蕪木の姿は見えない。元からあまり社交的な性格ではなかったが、この青い絵を描くようになって以降、人嫌いが高じて半ば行方不明のようになっている。

《芸術》(核心的手がかり)：

この青は非常に独特で、妙にきらきらとして流れる玉虫色のような印象を受けるが、視覚としては青く感じる。関係者は特にこれを『蕪木ブルー』などと呼んで、彼の絵の価値を高めるのに利用している。

絵に使われている青の絵具は日本画で使われるいわゆる岩絵具で、色のついた鉱石を細かく粉碎し、それを胡粉で定着させるという技法である。

この色に近いのは群青だが、それ以外の特殊な顔料を使っていると思われ、実際の絵具があれば詳細が分かる可能性がある。その入手先の可能性が高い、蕪木が懇意にしている画材屋『丹青堂』を紹介してもらえ。

《安心》、《信用度》(補助の手がかり)：

蕪木が神田周辺に下宿していることは知っているが、実際にはどこに住んでいるかは分からない。彼と顔を合わせるの、近所と思しき学生向けの安い喫茶店や居酒屋だ。

彼の下宿先の神田にある煙草屋の場所を知ることが出来る。

《美術史》(補助の手がかり)：

蕪木の『青い絵』はいわゆる抽象画、特に最近西欧で出現した『純粹抽象画』と呼ばれる、自己表現的な抽象画ではないかと推測される。

『純粹抽象画』はオカルティックな世界観に加え、神智学の影響を受けたなどと言われているが、蕪木にはオカルト趣味、神秘主義的なところは無かった。

《聞き集め》などの交渉系技能(補助の手がかり)：

展示されている通り、蕪木には2種類の絵がある。オレンジを基調にした写実的な風景画と、青い抽象画。関係者いわく、「オレンジは苦悩、ブルーは狂気」。

風景画が売れないのが高じて悩みが狂気に転化したのではないか、などと口さがない連中や、まだ売れていない画家が言っているという。

《天文学》(補助の手がかり)：

『青い絵』の吸い込まれそうな印象、今までに見たことが無いような色のはずだが、それをどこかで見たような錯覚を覚える。

それを見続けていると、その青が宇宙の色だという妄想が芽生え、難易度4の<安定度>判定を行う(1点減少)。

2:蕪木に会う

蕪木は神田で煙草屋の2階に下宿している。

探索者が訪ねると2階からふらふらとした様子で蕪木が降りてくる。彼は探索者が直接訪ねて来たことには疑問を抱かない。

常と変わらない様子で、自身の部屋兼アトリエには人を入れたがらないのに加え、今はいつも以上に散らかり放題なのでそこらへんの安い学生向けのカフェや、居酒屋に行こうと言う。

蕪木は見るからに不健康そのもので、歩くのも難儀な様子でふらふらとしている。探索者が声を掛けると、大丈夫だと応え、今、描いている作品が最高傑作になるであろうことや、創作が佳境なので少し根を詰めすぎているだけだろうと言う。

ここでは探索者が蕪木に張り付くことがないように、不健康ではあるが素行に不自然ではないと伝える。また、彼は人嫌いとはまでは行かないが、創作については静かな場所で孤独に行うことを好む為、作業場、作業中の立ち入りはよほどのことが無い限り拒否する。

これ以降、蕪木を訪ねても留守であり、半ば行方不明の状態となる。彼は探索者と会った後、『青い絵』を完成させる為に自室に籠っている。作品自体が天井裏そのもので、そこに入り込んでいる為、大家からは留守のように思われている。

探索者が強引に入り込もうとする可能性はあるが、大家はやんわり断られるか(大家は蕪木の人嫌いを知っているし、アトリエ兼自室へ人を通さないように言われている)、ひどい場合は警察へ通報される。

《医学》(核心的手がかり)：

蕪木の顔色は青いのを通り越して、死人のような灰色になっている。明らかに健康状態がおかしいが、その原因は分からない。まるで生命そのものが衰弱しているように思える。

皮膚の潤いも失われてカサカサに乾燥しており、通常の人間のような肌色が失われていることが分かる。

《真意看破》(補助の手がかり)：

蕪木は自分自身の体調や精神状態について「大丈夫だ」の一点張りだ。

創作が佳境であり、邪魔が入るのを好ましく思っていないことは確かだが、探索者達を騙すような意図はない。

彼自身の認識では多少は身体が重いものの、創作意欲が溢れてとにかく絵が描きたいと思っており、そこに嘘は無い。

《聞き集め》(補助的の手がかり)：

蕪木は売れない芸術家として近隣に認知されていたが、例の『青い絵』が売れているせいで芽が出ない画家の卵から、画家先生へと評価が変わっている。

売れない時代は彼のパトロンであった児島の他に、美校時代の友人が訪ねて来るぐらいだったが、最近ばかりとした身なりの画商らしき姿も見られるようになった。

蕪木自身は売れるようになったにも関わらず、学生街である神田から動かず、新たな下宿を探すようなこともなく、相変わらずの様子で創作に励んでいる。

3: 『丹青堂』、青い顔料

『丹青堂』は本郷区(現在の文京区の辺り)、湯島天神(湯島天満宮)の近くにある小振りの商店だ。

元は江戸から続く小間物屋だったが、明治期に主人が日本画に凝り出して上野の東京美術学校(通称、美校)の学生相手に商売を始めたのがきっかけで画材を主に取り扱うようになり、次第に主力の小品となっていった。

蕪木が懇意にしている店であり、貧乏で困っていたときにも親切にしてもらっていた。絵が売れるようになってからは借金のようなものは全て綺麗になっており、お礼としてオレンジの絵の風景画を贈って、それが店先に飾られている。

探索者が店に入ると、大量の本格的な画材が整然と、しかし所狭しと並ぶのに圧倒される。中には日本画だけでなく、西洋画にも使うような道具も置かれており、幅広い商品を扱っていることが分かる。

店の奥に声を掛けると、主人の丹羽仁が出てくる。

先代は絵の才能もそれなりにあり、道楽者ながら

人脈を築いて画材屋としての道を開いた。

2代目は職人氣質で画材の目利きは確かで、画材屋としては堅実な商売を行っている。絵を描く才能は無いが、絵画の評価の方も確かであるとその業界では有名になっている。

丹羽は蕪木の様子から心配はしているが、それもある意味では平常運転なのでそれとなく様子を聞いた程度だ。蕪木とは個人的な付き合いはほとんどないので、彼の個人情報を持っていない。

《芸術》、《安心》など(核心的の手がかり)：

蕪木ブルーと呼ばれている青色は、群青に近いだが、それとは異なるものだ。群青は普通、藍銅鉱(アズライト)や、それに孔雀石が混じったものを使うが、蕪木の使っている青色は巢鴨の『枯野』で拾ってきたという石で作った。石は藍銅鉱に似ていたが、実際はまったく違うもので何かは分からなかった。

蕪木から少しでも安い顔料が欲しい、と言われていたので試しに作ってみたところ、思いのほかよい色が出たので蕪木その他、何人かに渡した。しかし、あの青色を出せたのは蕪木だけだったので、それを使い続けたのも彼だけだ。

蕪木は金が無い時代でも顔料にこだわっていた。顔料は貴重な鉱石を使うものが多く、基本的に高価だが、彼はそれこそ命を削って絵を描いていた。

《美術史》、《歴史学》(補助的の手がかり)：

大阪にも『丹青堂』という江戸から続く書道、画材を扱う店があるがことは無関係である。丹は赤を表すので、日本の伝統的な色として付けた名前が被ったようだ。

上野にある東京美術学校(現在の東京芸術大学の母体の一つ)に近いこともあり、学生が多く来る店である。

蕪木のように才能があって金が無い学生や画家に格安で画材を譲っているが、店主の見る目は厳しく確かであると有名だ。

4: 『呪いの青い絵』

蕪木の『青い絵』は呪いの絵とも呼ばれている。

見る者に狂気を呼び、不幸をもたらすと噂されており、購入者が死んでいるという噂がある。

蕪木が描く『青い絵』はいわゆる純粹抽象画のように見えるが、こういった絵を手掛けたことは今まで一度もない。一連の『青い絵』から急に画風が全く変わってしまっている。

抽象画について、彼は美校に通っていたこともあり、海外の芸術にも精通する友人知人も多い為、全く知らないということはある得ないが、急に作風を転換する何かがあったのではないかと思われる。

情報を得た後、実際に調査が可能なのは温井邸の火事の跡か、生存している人物のみであることを伝える。

《図書館》、《取引》(核心的手がかり)：

以下の最近蕪木の絵を買った人間を一通り得られる。

温井継宗(華族)、青い絵、火事で死亡記事を発見。

水越勝(画商)、青い絵、死亡記事を発見。

柿崎太蔵(華族)、オレンジの絵、購入記録のみ。

寺島定一(商人)、青い絵、入院した噂。

斎藤智信(画家)、オレンジの絵、購入記録のみ。

安田元三郎(商人)、オレンジの絵、死亡記事を発見。老衰死。

児島鎮(華族)、青い絵、購入記録のみ。

当時は、有名無名を限らず事件や事故の当事者を実名入りで報道するのが普通だった。記事によっては住所まで記載されている為、ここに挙げた人物の住所なども分かる。

《警官言葉》(補助的手がかり)：

蕪木の絵を購入した人物で、何らかの事件性があるって記録に残っているのは以下の通りである。

温井継宗、屋敷が全焼。家人は主人がおかしくなっただけ繰り返しており、被害者が火事の屋敷から逃げ出そうとしておらず焼死している。

寺島定一、突然暴れ出して家人に取り押さえられる。以降、根岸病院に収容され、面会謝絶になっている。

《聞き集め》(補助的手がかり)：

蕪木は『青い絵』を描きだしてから人気が出て、絵を買い求める人が増えた。

元は日本画の写実的なものを描いていたが、それに至るまでに西洋画も含めて様々な試行錯誤をしていたので、その中に抽象画があってもおかしくはない。

『青い絵』で有名になった為に、オレンジの絵の方も売れ始めていて『味わいがある』と好む人も多い。

5: 『枯野』

省電の巣鴨駅からさらに北へ抜ける間道沿いにある、灰色になった場所が『枯野』である。その先には昔、宿場町だったような小さな村が残っている。

『枯野』は2ヘクタールほどの広さで、その名前の通り枯れ果てた土地だ。

灰色の野は、あらゆる生命力と色彩が失われており、荒れていると言える状態かも知れない。灰色一色で遠近感がなくなる異様な空間となっている。

『枯野』の現象について、近隣に住民もなく利用されている土地でもない為、誰も気にしていない。

江戸期においては『枯野』の縁に小さな神社があった為に、それで人が行き来していたことはあったが、明治初期の神仏分離によって打ち壊されて以降、全く無人となっている。

『枯野』に踏み込んだ場合、難易度4の<安定度>判定を行う(2点減少)。

《野外活動》(核心的手がかり)：

『枯野』は大火事があるってこのような灰色の野になったと思われているが、実際は焼けて灰になったのではなく、色彩を失って死んでいる。何らかの作用がこの場から色と命を奪ったのだ。

『枯野』にはよく見ると大小4か所のクレーター状の地形があることが分かる。大きな落下物が途中で4つに割れたのではないかと推測できる。

アクション！：

《野外活動》の他、探索者が指定捜索：青い石か、クレーターを調べると言った場合、土中に埋もれた青い石を発見する。それが『丹青堂』の主人の言っていた青い石であることが分かる。

難易度5の<嫌な気配>判定に成功すると、掘り出

した石が脆く割れるような気配に気が付き、何らかの行動(石を捨てる、置いて離れるなど)を取ることが出来る。そうでない場合、石は探索者の手の中で割れる。特に誰が持っているか分からない場合は、不幸な探索者が持っていることになる。

土中から掘り出されたそれは、探索者の前でまるで何かが孵化するように内側から割れ、玉虫色のねっとり絡みつくような動く色彩が、腐った卵の中身のようにあふれる。

玉虫色の色彩にも関わらず、それは何故か『青く』感じ、蕪木の青い絵から感じる印象を受ける。難易度4の<安定度>判定を行う(4点減少)。

割れる瞬間にこの石を持っていた探索者は自動的に<体力>のプールポイントが1点減少する。

土中から掘り出されたことで孵化した『宇宙の彼方の色』(幼体)との戦闘になる(データの詳細はルールブックのP.130を参照)。

この幼体は栄養が不足しており、そもそも孵化すらできなかったのが無理矢理出て来た為、毎ラウンド自動的に<体力>のプールポイントが1点減少する(「早すぎたんだ！腐ってやがる」という状態だ)。

通常、『宇宙の彼方の色』には物理攻撃は通用しないが、そいつを閉じ込めていた殻(青い石)での打撃は有効となる。小さな間に合わせの武器(ダメージ修正値-1)扱いとする。

『宇宙の彼方の色』を撃退すると、玉虫色の色彩は地面に染みていくように消え、微かに青い光を残すがそれもすぐに消えて、後には何も残らない。

そいつが出て来た岩には空洞のようなものがあり、ますます卵のように思える。内部にはまだ青い色が残っており、まるで例の玉虫色をした青色が岩石に染みているように見える。

この後、『丹青堂』に戻ってこの石を見せると、確かに同じ石だと請け合うが、前のものはもっと鮮やかで、「活きがいい青だった」と言う。

《地質学》(補助の手がかり)：

掘り出した青い石は隕石であり、地球上の物質ではないことが分かる。

『丹青堂』の主人は藍銅鉱に似ているかもしれないと言ったが、青色であること以外はあまり似ていな

い。丹羽は《地質学》など知らず、単純に似ている色として判断したようだ。

《聞き集め》などの交渉系技能、(補助の手がかり)：

過去、『枯野』の近くに前に小泉宗一という小説家が住んでいたという。一時、危篤状態になって病院に担ぎ込まれた後、家を取り壊して引っ越して行って戻ってきていない。その後、『枯野』で大火事があり、灰色の野になった。

青い岩石は村の子供が好奇心から『枯野』を見に行った時に発見したものだ。たまたま集落に来ていた『丹青堂』の丹羽が、この岩石が藍銅鉱に似ていることに気が付き、貴重なものであるかもしれないと買い取った。

《天文学》(補助の手がかり)：

明治末期のハレー彗星が出現した時期に前後して、この辺りに隕石が落下したという記録がある。

帝大の寺田寅彦が調査したという話だが、詳細な記録は残っていないようだ。

6:温井継宗邸、火事の跡

『青い絵』の購入者の一人、温井継宗の屋敷は麻布区にある(現在の港区六本木の辺り)。火事があって全焼しており、まだ片付けられておらず生々しい痕跡を残している。

閑静な街であることに加えて、屋敷の敷地が広く隣家との距離があることもあって、人気は無い。

屋敷の跡地へ入るのには制限は無いが、無人の家族の敷地へと無断で入るのを警官や近所住民に見られるのはあまりよろしくないだろう。

《証拠収集》(核心的手がかり)：

木造建築が激しく燃えた為に、ほとんどのものが灰燼に帰しているが、出火元は主人の部屋、失火であると分かる。

主人の部屋の床面には温井が倒れていたと思しき痕跡があり、それは壁があった場所の前だ。壁は崩れているが、何か絵が掛かっていたことも分かる。

主人の部屋も他の場所と同じく一面灰だらけとなっているが、その灰の中に焼けて灰色になったので

はなく、色彩を失って灰色になっているものがあることに気が付く。

『枯野』へ行っている場合、そこで見たものと同じような現象がここでも起こったと考えられる。

《建築学》(補助の手がかり)：

温井邸はいわゆる偽西洋建築で一見西洋風の建築様式に見えるが、実際は日本建築で用いる建材、技法で建てられていたと分かる。

内部も含めて西洋風を徹底していたようで、部屋の構成や配置、家具類も西洋風かあるいは輸入した本物を使用していたようだ。

ここまで激しく燃えた理由は分からないが、建築材が何らかの理由で激しく劣化したのではないかと推測できる。

《官僚制度》(補助の手がかり)：

温井は華族で官僚だった。遣り手とは言い難いが、真面目で堅実、「高貴なるものの義務」と嘯いて芸術にも理解を示そうとしていた。

例の『青い絵』はその方面で流行だったので、画商の勧めで購入した。当初は特に気に入っていた訳ではないが、彼の様子がおかしくなるにつれて絵に執着しだした。

7:児島鎮邸、光の柱

もう一人の『青い絵の購入者』、児島鎮も赤坂区(現在の港区赤坂の辺り)の青山練兵場、赤坂離宮の近くに住んでいる。

児島邸へ探索者が主赴いた時点で、難易度4の**<嫌な気配>**判定に成功すると、児島邸内部には言いようもない不穏な雰囲気漂っていることに気が付く。

児島邸に正面から乗り込む場合、**《信用度》が5以上必要**だ。使用人を箠絡する等して内部へ入り込む場合、**《巧言令色》**、**《安心》**、**《威圧》**等の交渉系探索技能を使う。

どちらにせよ、探索者が児島邸に乗り込んだ直後、奥の客間から使用人らしき若い女性の悲鳴が響くと共に、淡い青い光が屋敷を満たす。

アクション！：

探索者が児島邸を訪ねるタイミングで、『青い絵』の中の『宇宙の彼方の色』が、宇宙に帰ろうとし始めたのだ。

青い光に満ちた屋敷の中で、使用人たちは驚きのあまり動きが止まっており、探索者達が入り込んできて咎めることも無く、聞かれたことには素直に答える(この状況なので、的外れな質問には答えることは無い)。

光の発生源と思われる奥の客間へ探索者が踏み込むと、そこには蕪木の『青い絵』が飾られており、それが淡く揺らめく青い光を放っており、まるで絵が生き物でもあるかのように蠢いているように見える。

絵の前には児島が倒れており、恐怖に引きつった萎びた顔を歪ませて、まだ生きていることが分かる。その顔色は灰色に見えるが、光の加減からか「青く」感じる。この部屋の異様な光景を見た場合、難易度5の**<安定度>**判定を行う(5点減少)。

部屋の中に探索者が入った場合、**<体力>**のプールポイントが1点減少し、『青い絵』に向かって生命力が吸い取られていることが分かる。以降、この場に1ラウンド留まる毎に+1点ずつの**<体力>**のプールポイントが減少する。

絵の前に倒れている児島を救出する場合、死体のように全く動かなくなっている巨体を部屋から運び出すには難易度5の**<運動>**判定が必要となる。これにはルールブック P.56 の『協力』が可能だ。

『青い絵』を攻撃しても、絵の額装には傷をつけることはできるが、青い絵自体は物理的な攻撃の影響を受けない(『宇宙の彼方の色』には物理攻撃は無効なのだ)。

児島を運び出すか、3ラウンドの経過後、絵の放つ青い光はさらに強まり、爆発音のような轟音と共に客間の2階部分と天井が吹っ飛び、周囲から生命力を吸い取りながら光の柱となって天に還っていく。

部屋の中に残っている探索者は**<体力>**のプールポイントが6点、**<正気度>**のプールポイントが1点減少する。児島を部屋に残していた場合、彼は死亡する。

部屋の外に出ていた場合は、強い光で目がくらむがその他の影響はない。児島を連れ出していると、

彼は辛うじて生きており、《医学》によって容態を安定させることが出来る。

探索者が即座に逃走を選んでいて場合、難易度2の<逃走>判定に成功すれば屋敷を離れることが出来る。その後、爆発音に似た大きな音とともに吹き上がる青い光の柱を屋敷の外から目撃することになり、難易度5の<安定度>判定を行う(5点減少)。

児島が死んでいる場合、有無を言わず追い出されるか、駆け付けた警察関係者に連れ出されるかする。

児島を助けていれば、彼自身はその病状から即座に病院に連れ込まれるが、残った探索者達は屋敷の中を調べて回っても不問に付される(家人に怪しげな連中ではないと保証してもらえる)。

『青い絵』があった客間は、2階部分が完全に吹っ飛んでおり、青空が見えている。

衝撃によって破壊された部屋は全てが灰色になって色彩が奪われている。中に踏み込むと足元の床も脆くなっており、灰が積もっているように思えるが、もとあった絨毯や床が灰のようになって崩れていることが分かる。

《証拠収集》(核心的手がかり)：

爆発の中心は『青い絵』だ。そこから放射状に部屋にあったものの残骸が散らばっているが、奇妙なことに爆発とは別の何かが絵の方へ向かった痕跡が見られる。

灰の中から集めた元は『青い絵』であったであろう厚めの和紙の断片から、それには全く色彩が無くなっており完全に灰色になっていることが分かる。

部屋の中には蕪木のオレンジの絵もあり、そちらは爆発によって傷んではいるものの、半ば灰色になっておいる程度で済んでいる。

《医学》(補助的手がかり)：

児島が生きている場合、彼を診察した医者から(《医学》を持つ探索者自身でもよい)、特に身体に異常は認められないにも関わらず、衰弱しきっており、生きているのが不思議なぐらいだと言われる。

唯一、異常と認められるのは身体の色が不自然な灰色になっており肌色が失われていることだ(もし

も、児島の体内に異常が無いかと開腹手術などを試みた場合、その内部にまで灰色が及んでいることが分かり、難易度5の<安定度>判定を行う(4点減少))。

《法医学》(補助の手がかり)：

児島が死んでいる場合、検死によって外傷などの直接的な死に至る原因が発見できず、精神的なショックか、理由は分からないが急激な衰弱死、生命力そのものが失われたことが分かる。

《芸術》、《信用度》など(補助の手がかり)：

児島は没落した華族であった一族を自身の商才を持って建て直した傑物である。世間では成金のように言われているが、若いころに美術を志していたこともあり、若い売れない芸術家たちのパトロンとなって様々な援助を行っていた。

客間にあった『青い絵』は蕪木から贈られたものだが、わざわざ画商を介して購入して蕪木に金を渡している。

蕪木がオレンジ色の風景画を描いていた時代から援助しており、爆発のあった部屋にはオレンジの絵も何枚かあった。

8:蕪木の『青い絵』

蕪木の部屋に乗り込むには、下宿の大家を説得するか、無理矢理押し入る、緊急事態だと無視するのでもよい。

蕪木の部屋は6畳で下宿としては広いが雑然としている。しばらく使っていないと思われる汚れた寝具、画材、描きかけのスケッチ等が置かれている。

『青い絵』に使われる青い絵具や、下書き、作りかけの作品なども見当たらない。

部屋は無人だが、天井から何かが蠢ているような気配を感じる。難易度4の<嫌な気配>判定に成功すると、天井から温井や児島の屋敷で感じた不穏な雰囲気漂っていることが分かる。

《建築学》等がなくとも、こういった日本家屋は天井裏に上がる為の落とし戸のようなものが天井の隅についていることは分かる。

探索者は梯子を使うか、難易度 4 の<運動>判定によって天井裏へ上がることが出来る。そこは薄い屋根の間からところどころ漏れてくる光によって、天井裏全体に『青い絵』が描きこまれているのが見える。蕪木はその絵の一部になっている。絵の真中で自身に青い絵具を塗りたくって床に倒れこんでおり、ときおりまだ生きていることを示すように手足がのろのろと動く。

探索者は暗闇で輝く『青い絵』が深宇宙を表していることに気が付き、この異様な光景と合わせて難易度 5 の<安定度>判定を行う(5 点)。

驚く探索者の前で『青い絵』は淡い光を放ち始める。完成した絵が宇宙に還ろうとし始めたのだ。

その場に居る全員は、毎ラウンド<体力>のプールポイントが 1+経過ラウンド点減少する。

倒れている蕪木を助け出そうとする場合、彼は動かされることに抵抗する。難易度 4 の<運動>判定の対抗判定となる(蕪木の<運動>のプールポイントを 3 として、毎回 1 点ずつ使う)。こちら『協力』が可能だ。ルールブック P.56 の『対抗判定』、『協力』を参照すること。

3 ラウンドが経過するか、蕪木を天井裏から助け出した後、目も眩む青い閃光が発せられるとともに爆発音が響き、天井と天井裏が吹き飛ぶ。

探索者の目の前で天井裏の青い色彩が光の柱となって天に向かって伸び、光と爆風が広がるのとは逆に、周囲から色彩が集まっていくのが見える。吸い取られた色は光の柱の中に消え、周囲は見る間に死んだ灰色へと変わっていく。色彩の移動が終わると同時に光の柱の中のものは宇宙へと還っていく。

天井裏に残っている生き物は、光の柱に生命力を吸収されて<体力>のプールポイントを自動的に 12 点失う。天井裏から逃れている場合は、3 点で済む。

宇宙へ還っていく『宇宙の彼方の色』を目撃した探索者は、<正気度>のプールポイントが 1 点減少するが、すでに兎島邸で光の柱を目撃している場合、<正気度>の減少は無い。

光が収まった後、蕪木の下宿の 2 階部分はきれいさっぱり吹き飛んでおり、辺り一面が灰色の残骸で埋め尽くされている。

蕪木を天井裏から連れ出していなかった場合、それらの残骸に埋もれて死んでいる蕪木を発見することになる。

連れ出すのに成功していた場合、彼は兎玉同様に非常に衰弱しており、何故生きているのか分からない状態だ。<医学>によって容態を安定させることができるが、即座に入院させる必要がある。

9:事件の後

蕪木の部屋の爆発により、煙草屋は立て直しが必要になり、彼が生きている場合はその部屋を立ち退いて(追い出された訳ではない)、郊外へ引っ越した。

煙草屋の周辺には灰色の残骸が飛び散った以外に、光の柱が見えた後はしばらくの間は疲労感が抜けないことを訴える住民が多かったが、それもしばらくすると健康を取り戻して平常に戻る。

シナリオの結末がどうなったにせよ、『青い絵』に使われた絵具は全て失われ、もう描かれることは無い。

探索者達はしばらくの間、残った『青い絵』の始末に奔走するだろう。蕪木が生きていれば、彼自身が手を貸してくれる。

後始末を済ませた後については、探索者自身に語らせよう。

蕪木はもう『青い絵』を描くことはできないし、描く気も無い為、またオレンジ色の風景画を描き始めて、そこそこ売れる画家になる(怪想社の頼みで怪奇風の挿絵を描くこともあるが)。

生き延びた探索者はルールブック P.81 の『探索者の成長』の規定通りに追加の作成ポイントを得ることが出来る。

参考資料、その他

本シナリオで主に参照した資料等を記載する。

- 新訳クトゥルー神話コレクション⑤ 宇宙の彼方の色 星海社
『宇宙の彼方の色』、H・P・ラヴクラフト、森瀬繚訳
- ナイト・フライヤー 新潮文庫
『オレンジは苦悩、ブルーは狂気』、デイヴィッド・マレル、浅倉久志訳
- アメリカ怪談集 河出文庫
『月を描く人』、D・H・ケラー、荒俣宏訳

- 暗黒神話 TRPG トレイル・オブ・クトゥルー 新紀元社
- 暗黒神話 TRPG トレイル・オブ・クトゥルー・ジャパン 新紀元社

- 『大正略字』 フォント
表紙に使用している『大正略字』フォントは以下の URL よりダウンロード可能。
<https://booth.pm/ja/items/363104> ※フリーなのでぜひ、ご活用を！

- 帝都モノガタリ
<http://fgate.cyber-ninja.jp/index.html>

あとがき

わりと長い期間腹持ちしていたネタ、デイヴィッド・マレル『オレンジは苦悩、ブルーは狂気』の絵を描く人のシナリオです。

ネタ的に『灯火の行く橋』と被る部分があり、作成するか悩むところもあったのですが、トレイル・オブ・クトゥルーで何か新作をやるのにちょうどよかったかと思います。

元ネタのデイヴィッド・マレル『オレンジは苦悩、ブルーは狂気』は名作です。新訳も出ているようなので、是非とも読むことをお勧めします。

奥付

発行日：初版 令和 4 年 4 月 3 日

発 行：F.G./龍門亭 EDO-RAM(Twitter:@EDO_RAMv200)